

〈知的・自閉症・情緒障害教育〉

軽度知的障害のある生徒に対するキャリア教育の工夫

— キャリアガイダンスの活動プログラム「私のキャリア」の作成を通して —

沖縄県立沖縄高等特別支援学校 南風原高校分教室教諭 前 川 考 治

I テーマ設定の理由

中央教育審議会（2011）はキャリア教育の定義を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とし、キャリア発達とは「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」としている。この考え方は障害の有無にかかわらず全ての児童生徒の基本となるものである。

知的障害の程度が比較的軽度（以下「軽度知的障害」とする）の生徒について、文部科学省（2013）は「他人との意思疎通に軽度の困難があり日常生活を営むのに一部援助が必要で、社会生活への適応が困難である程度」としているが、2001年に世界保健機関（WHO）に採択された国際生活機能分類（ICF）による障害の捉え方を踏まえ、「障害の状態は知的水準だけでなく、環境的・社会的条件で変わり得る可能性がある」と環境の重要性も示している。このような実態のある軽度知的障害のある生徒の数と割合が「全国の特別支援学校の高等部で特に増加している」と、国立特別支援教育総合研究所（以下「特総研」とする）（2010）が指摘している。沖縄県も同様の傾向があり、沖縄県教育委員会（2012）は「県立特別支援学校編成整備計画（平成24年度～平成33年度）」の中で「高等部における軽度知的障害生徒の教育の場の拡充」を施策として挙げている。これらのことから軽度知的障害のある生徒を対象とした学校におけるキャリア教育は、生徒の現在および将来の社会参加を推進する上で今後ますます重要になってくると考える。

沖縄高等特別支援学校（以下「沖高特」とする）は軽度知的障害のある生徒を対象とし、卒業後の職業的・社会的自立を目指した、本県唯一の高等部単独設置の特別支援学校である。平成3年設立で定員135名の沖高特本校に加え、それぞれ定員30名の3つの分教室（平成22年度設置の中部農林高校分教室、南風原高校分教室、平成26年度設置の陽明高校分教室）で構成されている。今回研究を行う南風原高校分教室（以下「南風原分教室」とする）は各学年1学級10名、3学年合計3学級30名の生徒が在籍しており、ほぼ全員が卒業後すぐに就職することを希望している。「知的障害の無い南風原高校の生徒と、行事、授業、部活動等を共にを行うことを通しての『障害の有無にかかわらず共に学ぶ活動』と、「学校活動全体を通しての『就職を目指す活動』の両立によって生徒の現在および将来の充実を目指す取組を行ってきた。1期卒業生、2期卒業生、3期卒業生（今年度卒業予定）の進路決定率は100%で、卒業生25名中23名が企業へ就職（就職率92%、今年度卒業予定の10名は内定）、2名は福祉事業所を利用しており、就職した全員が仕事を継続している。今後も生徒全員の想いを実現していくには「充実した学校生活を送るために必要な力」「卒業後民間企業や公的機関等（以下「事業所」とする）で働くために必要な力」、そして「それらの力を高めるための、教育内容と方法」を全職員で検討、実践、評価、改善し続ける必要があり、それらを検討するにはキャリア教育の視点を踏まえた考え方が必要だと考える。

一方、キャリアガイダンスは、「道徳、自立活動、特別活動、職業科のねらいや内容を中心とした各教科等を合わせた指導」であり、就労と自立に向けて生徒の意識を高めることをねらいとして行う。沖縄県の特別支援学校では沖高特にのみ設定されており、今年度から新たに導入された授業である。南風原分教室では毎朝10分の授業および就業体験前後、学期始め、学期末等の50分授業という形態で行っているが、「どのような内容と手立てで行えば、生徒の意識を高めることができるか」を職員間で共有することが課題である。ガイダンスについて國分康孝・清水井一（2006）は「児童・生徒・学生が、学習・進学・就職などの面で、その個性や能力を最大限に発揮できるよう導く教育活動の全てを指す」としている。このことからキャリアガイダンスでは、自分らしい生き方を実現するために必要な力を高める内容を計画的に取り扱うことが重要だが、その力は幅広いため、内容の全てを取り扱うことは難しいと考えられる。

以上のことから、本研究では、キャリアガイダンスの授業において「働くために必要な力」を高めるための活動プログラムである「私のキャリア」の作成を目指す。就職を目指す生徒が、「働くために必要な力」を高める活動に積極的に取り組むことは、将来の職業的・社会的自立のみならず、現在の生活の充実にもつながると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

キャリアガイダンスの授業において、高めることのできる「働くために必要な力」を明確にし、力を高める活動として、事業所の実態に即した実践的な活動に生徒が取り組むことで、生徒の就職への意欲が向上し、「働くために必要な力」が高まるであろう。

II 研究内容

1 軽度知的障害のある生徒の実態

文部科学省教育支援資料（2013）は、「平成14年以前は309号通達（現在は廃止）によって軽度の知的障害は『知能指数IQ50から70の程度』としていたが、現在は、知能指数IQによって『軽度』などと規定せずに、日常生活及び社会生活への適応能力の観点も含めて規定される」とし、障害の程度が比較的軽度の生徒の状態像が示されている（表1）。本研究においても、「障害の状態は環境的・社会的条件で変わり得る可能性がある」という、国際生活機能分類（ICF）の考え方を踏まえて、知能指数IQや現在の生徒の障害の状態だけにとらわれず、就職を希望している生徒の想いに応じた、働くために必要な力を高める活動を設定し、生徒の力を高める取組を行う必要があると考える。

表1 障害の程度が比較的軽度の生徒の状態像
（文部科学省教育支援資料による）

具体的な実態
○他人との日常生活に使われる言葉を活用しての会話はほぼ可能。
○食事、衣服の着脱、排泄、簡単な片付け、身の回りの道具の活用などにほとんど支障がない。
○抽象的な概念を使った会話などになると、その理解が困難。

2 軽度知的障害のある高校生に対するキャリア教育

特総研（2010）は、知的障害のある児童生徒のキャリア教育について「児童生徒が、その時々における学習や生活における経験を自ら意味づけ、価値付けし、方向付けできるように支援する教育」としている。このことから就職を目指す軽度知的障害のある南風原分教室の生徒に対するキャリア教育は、生徒自身が「私は働ける」と実感できる活動を通して、社会に通用する力を身につけ、就職し働き続けることができる教育だと考える（図1）。

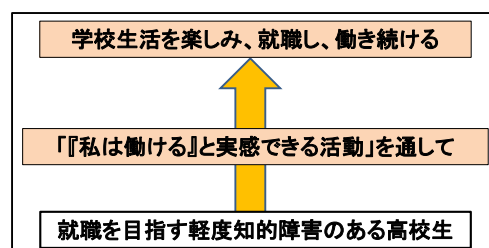


図1 本研究におけるキャリア教育の考えのイメージ図

3 広がりつつある沖縄県における知的障害者の雇用（就職後働き続ける力も必要）

厚生労働省沖縄労働局によると沖縄県の障害者の雇用率算定の対象となる50人以上規模の民間企業834社に雇用されている障害者数は3,218人、うち知的障害者は885人でいずれも過去最高だった（平成26年6月1日現在）。一方、法定雇用率達成企業数は55.8%と、前年より2.8ポイント増加しているものの前々年度の57.7%には及ばなかった。このことから沖縄県においては、知的障害者の雇用が広がっており、今後も拡大する余地があると考え。そして南風原分教室の卒業生の92%が就職していることと併せて考えると、生徒には就職する力に加え、就職後働き続ける力も重要だと考える。

4 「働くために必要な力（就職する力・就職後働き続ける力）」の検討

（1）キャリア教育で育成すべき力ー「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」への転換ー

文部科学省（2011）は、「中央教育審議会（2011）が示した基礎的・汎用的能力は、国立教育政策研究所（2002）が例示した4領域8能力を補強し、より現実的に即して、社会的・職業的に自立するために必要な能力を育成するもの」としている。また、特別支援学校におけるキャリア教育の留意点として、菊池一文（2013）は『基礎的・汎用的能力』はその育成そのものを意味しているのではなく、これらをもとに各学校において『育てたい力』について検討し、組織的に理解・共有することが重要」と指摘している。これらのことから本研究における「働くために必要な力」は、「基礎的・汎用的能力」を踏まえた上で、南風原分教室の現状に合わせて検討する必要があると考える（表2）。

（2）沖高特の就業体験における実習評価票の評価項目（以下「沖高特15の力」とする）

「沖高特15の力」は、平成16年度から就業体験の評価項目に活用されている。そして平成27年度から沖高特の個別の指導計画の項目として活用される。本研究ではこの沖高特15の力を「働くために必要な力」の一つとして取り扱う。ただし「沖高特15の力」は10日間の実習でも事業所が評価で

きる項目に限定されていることに留意する必要がある。

- (3) 特総研（2010）の「知的障害の児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス（試案）』知的障害のある生徒の高等部段階において育てたい力」（以下「特総研16の育てたい力」とする）

「特総研16の育てたい力」は、「沖高特15の力」で取り扱いの少ない、自己理解・自己管理能力やキャリアプランニング能力に関する力も取り上げている。「特総研16の育てたい力」は「キャリア教育の視点による教育課程、授業改善および学習内容の一貫性・系統性を整理するためのフィルターとして活用するために作成されたもので、児童生徒のできる・できないについて評価するものではない」ことに留意する必要がある。学校全体で働くために必要な力を意識した取組を行うには、この「特総研16の育てたい力」を踏まえた授業づくりが重要だと考える。

表2 「基礎的・汎用的能力」と「沖高特15の力」、「特総研16の育てたい力」の関係

	人間関係形成・ 社会形成能力	自己理解・ 自己管理能力	課題対応能力	キャリア プランニング能力
基礎的・汎用的能力 中央教育審議会 (2011)	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力。	自分が「できること」「意義を感じる」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力。	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力。	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力。
沖縄高等 特別支援学校 15の力 (2004 年から活用)	①身だしなみ ②あいさつ・返事 ③言葉づかい ④報告・質問 ⑤対人関係 ⑥指示を受ける態度	⑦責任感 ⑧積極性	⑨集中力 ⑩体力 ⑪確実性・速度 ⑫巧緻性 ⑬指示の理解力 ⑭準備後片付け ⑮安全性	取扱いが無い
「知的障害の児童生徒の『キャリア・プランニングマトリックス（試案）』高等部段階において育てたい力」 国立特別支援教育 総合研究所（2010）	②協力・共同 ③意思表現 ④場に応じた言動 ⑥法や制度の活用	①自己理解・他者理解 ⑦消費生活の理解 ⑩夢や希望 ⑪生きがい・やりがい ⑮肯定的な自己評価	⑨習慣形成 ⑯自己調整 ※様々な選択肢の中からよりよい選択をする力	⑤情報収集と活用 ⑧役割の理解と働くことの意義 ⑫進路計画 ⑬目標設定 ⑭自己選択（決定・責任）

Ⅲ 研究の実際

1 生徒の実態

(1) 対象学級の概要

検証授業は1年生（男子6名、女子4名合計10名）で行った。アンケートの結果、全員が就職を希望しており、「希望する職種」や「なぜ働きたいか」についての考えをもっていることが分かった。しかし一方で、「将来について悩んでいる生徒が2名」「とても悩んでいる生徒が1名」いた。全員が小学校または中学校時代に通常学級に在籍した経験があり、学習不振や人間関係のつまづき等の体験から自信や自己肯定感がもてない生徒もいた。これらのことから、まずは成功体験を重ね、自分の成長を感じ、「自分は働ける」と実感し、就職に対する意欲を高めることが必要だと考える。

(2) 就業体験の評価（「沖高特15の力」の評価）

平成26年度2学期就業体験（10月14日～24日）において、事業所が行った「沖高特15の力」に基づいた評価によると、対象学級の生徒10名全員が「就職する力がある」、「通常の生徒と比べても遜色ない」等の評価をうけた。授業を担当している教師も同様の評価をしていることから、1年生10名は卒業後就職する力の素地がある生徒たちであると考えられる。

2 沖高特進路部が実施した就業体験実習先の事業所に対するアンケート結果

平成26年10月に実施した就業体験の実習先事業所へのアンケート「知的障害者の雇用の際重視する力『沖高特15の力』から」の分析を行った。121事業所中69事業所から回答が得られ（回収率57%）、1位の力を3ポイント、2位の力を2ポイント、3位の力を1ポイントとして集計をした結果を示す（図2、図3）。特徴的なのは「13指示の理解力」が雇用前、雇用後ともに重視されていることである。メモを取ることで、理解力を補う必要があると考える。その他に雇用前に重視する力として「1身だしなみ」「2あいさつ・返事」、雇用後に伸ばしたい力として「11確実性・速度」「15安全性」、そして仕事の技能面以外の「5対人関係」「7責任感」「8積極性」が挙げられた。仕事を長く続けるた

めには職場の人と会話をし、自らの能力を把握した上での積極的で責任ある行動が必要だと考える。

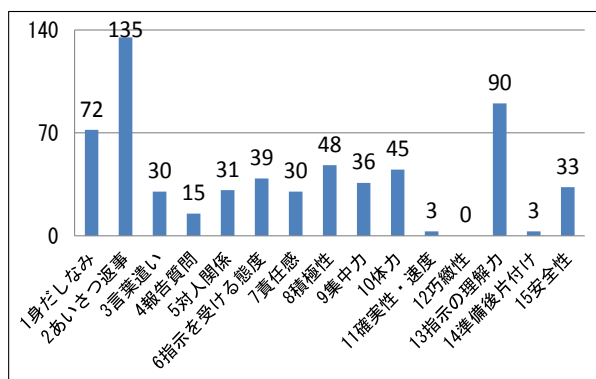


図2 実習先の事業所（69カ所）が雇用前に重視する力

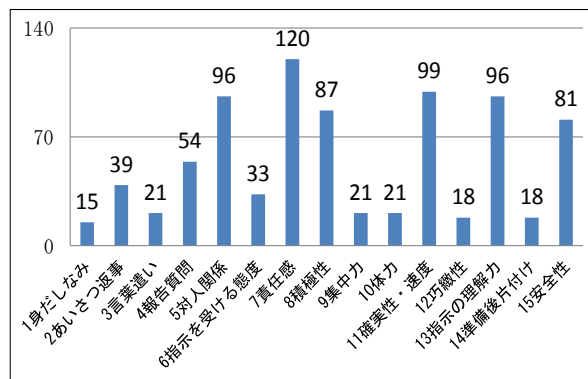


図3 実習先の事業所（69カ所）が雇用後に伸ばしたい力

3 本研究におけるキャリアガイダンスの内容および手立て

(1) 特別活動、道徳、自立活動に共通している内容

沖高特のキャリアガイダンスは、「道徳、自立活動、特別活動、職業のねらいや内容を中心とした各教科等を合わせた指導」であり、就労と自立に向けて生徒の意識を高めることをねらいとして行っている。特別支援学校高等部学習指導要領（2009）を検討した結果、特別活動、道徳、自立活動に共通している内容として、中央教育審議会（2011）が示したキャリア教育で育成すべき力である基礎的・汎用的能力の中の「人間関係形成・社会形成能力」に関する内容が挙げられていることが分かった（表3）。このことから、キャリアガイダンスの内容は、学習指導要領におけるこれらの教科等の内容とキャリア教育を関連付けて行う必要があると考える。

表3 特別活動、道徳、自立活動に共通する目標、内容（特別支援学校高等部学習指導要領による）

特別活動の目標の抜粋	道徳の内容の抜粋	自立活動の内容の抜粋
望ましい集団活動を通して、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。	2 他の人とのかかわりに関すること 4 集団や社会とのかかわりに関すること	3 人間関係の形成 6 コミュニケーション

(2) 「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」を高める内容

道徳、自立活動、特別活動及び事業所が重視する力の全てに「人間関係」が挙げられた。また鴨下（2013）は発達が気になる生徒のソーシャルスキルの獲得について「ソーシャルスキルを身につけることを阻む要因として『自尊心』が育っていない」と指摘している。このことから本研究では、生徒の働く力を高めるために、「集団活動における、職場の実態に即した活動を通してキャリア教育で育成すべき力『基礎的・汎用的能力』の中の主として『人間関係形成・社会形成能力』、『自己理解・自己管理能力』を高める取組」を行った（図4）。

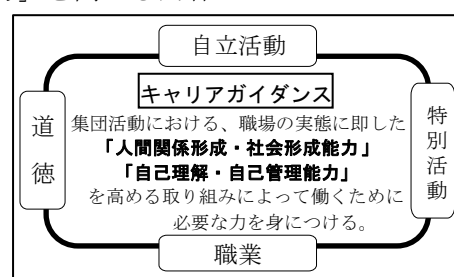


図4 キャリアガイダンスの内容のイメージ図

(3) 人間関係づくりプログラムや社会的スキルのプログラムによって働く力を高める

渡辺明広（2014）は軽度知的障害のある高校生に対する教育プログラムについて、「対人関係や集団行動に必要なソーシャルスキルの向上を図ることは、社会生活における日常の問題を解決する力の育成につながる」とし、効果的な例を示している（表4）。これらのプログラムの内容と「特総研16の育てたい力」の内容を照らし合わせた結果、「2 意思表示」「4 肯定的な自己理解」「5 自己理解・他者理解」「7 自己調整」「15 自己選択」の点で共通していることがわかった。

表4 人間関係づくりプログラムや社会的スキルのプログラム（渡辺による）

グループ エンカウンター	ソーシャルスキル トレーニング	アサーション トレーニング	ストレスマネジメント教育
学級のグループ活動で、メンバーが本音を出し合うことで、互いの理解を深め、自分自身も受容する。人間関係づくりや相互理解、協力して問題解決する力などが育成される。	「ソーシャルスキル」とは、対人関係や集団行動を上手に営んでいくための技能(スキル)をいう。対人関係にうまくつきあうことを示す子どもが発達段階において獲得すべきスキルのトレーニングを行う。	自分と相手、互いのアサーティブ権(人権)を尊重した上で、自分の意見や気持ちをその場にふさわしく表現できるようにする。自己表現と共に他者との関わりを円滑にする社会的行動の獲得を目指す。	ストレスに対する自己コントロール能力を育成する。ストレスの本質を知り、ロールプレイングによるストレスや安心する気持ちの体験、実際のリラックス体験などストレス対処法を習得する。

このことから本研究においてもストレスマネジメントを高山恵子・平田信也（2014）、アサーシ

ジョン・トレーニングを園田雅代（2013）、ソーシャルスキルサポート法を鴨下賢一（2013）、構成的グループエンカウンターを國分・清水を参考に活動プログラムの作成を行った。生徒の実態に即して活動の流れを設定することから、それぞれの技法の習得の流れと異なることもある。

4 キャリアガイダンスの活動プログラム「私のキャリア」の概要（図5）

（1）一つのファイルにまとめた活動プログラム

活動プログラム「私のキャリア」の活動内容を紙面にして一冊のファイルにまとめた。それによって、生徒が見通しを持って活動し、活動を振り返ることができる考えた。

（2）生徒の経験に基づいた実践的な活動を繰り返し行う

文部科学省教育支援資料（2013）は、知的障害のある生徒は、「抽象的な指導内容よりは、実際の・具体的な内容が習得されやすい傾向がある」と示している。このことから、就業体験、校外実習および学校で体験したことや想定されることのように、「生徒が自分自身のことだと受け止めやすい活動」、「働く力を身につけることに直接役立つ活動」を繰り返し行う必要があると考えた。

（3）異なるタイプの学習方法（視覚型、聴覚型、体得型）

高山・平田は学習方法について「視覚型、聴覚型、体得型があり、人それぞれに適した方法がある」と指摘している。このことから「5つの繰り返し行う活動」（図5参照）を行うことによって、視覚、聴覚、体得の活動を織り交ぜ、生徒の学習機会を増やすことをねらった。また「良い点を伝え合う」のような体得型、聴覚型の活動でも、「生徒の言葉を、教師がパソコンに打ち込み、プロジェクターによって投影し生徒に示す」等の「題材の視覚化」を行うことによって生徒の学習機会を増やすこともねらった。

（4）最終的に目指す生徒像（就職後働き続ける力のある生徒）

就職する力に加えて就職後働き続ける力も身につける活動を設定するために、特総研（2012）が示した「軽度知的障害のある高校生に必要な性の高い指導内容」および「見てわかる社会生活ガイド集」編集企画プロジェクト（2013）が示した「知的障害・発達障害の人たちのための長く働き続けるための社会生活での課題」を最終的に目指す生徒像の一つの在り方として明記した。

キャリアガイダンス(自立活動 道徳 特別活動 職業を合わせた内容)							
授業の目標：就職するために必要な力（就職する力・就職後働き続ける力）を高める							
活動プログラム「私のキャリア」：生徒が見通しを持って活動し、活動したことを振り返る							
内容：主としてキャリア教育で育成すべき力 中央教育審議会（2011）の中の「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」を高める							
人間関係形成・社会形成能力		自己理解・自己管理能力		課題対応能力		キャリアプランニング能力	
							
活動内容	就業体験で体験したこと 想定されること		校外実習で体験したこと 想定されること		学校で体験したこと 想定されること		就職後に 想定されること
	2つの毎回行う活動			5つの繰り返し行う活動			
活動の種類	出席点呼 ひとこと発表 メモ		あいさつ唱和	意見発表	付せん紙を用いた 意見の出し合い	良い点を 伝え合う	ロールプレイ ビデオ チェック
活動および 手立ての 参考にする 手法	ソーシャルスキルトレーニング		ソーシャルスキル トレーニング	グループ エンカウンター	アサーション・ トレーニング	「アサーション・ トレーニング」 「ストレス マネジメント」	ソーシャルスキル トレーニング
高める 15の力	2 あいさつ・返事 3 言葉づかい 13 指示の理解力	1 身だしなみ 2 あいさつ・返事 3 言葉づかい	1 身だしなみ 2 あいさつ・返事 3 言葉づかい	5 対人関係	3 言葉づかい 5 対人関係	3 言葉づかい 5 対人関係 8 積極性	1 身だしなみ 2 あいさつ・返事 3 言葉づかい
意識する 特総研16 の育てたい 力	6 習慣形成	3 場に応じた言動	8 目標設定 9 夢や希望	2 意思表示	4 肯定的な自己評価	7 自己調整 ※様々な選択肢の 中からより良い 選択をする力	5 自己理解 ・他者理解
最終的に 目指す生徒 像	【対人コミュニケーションに関すること】*1 1. 自分の気持ちや考えを言葉で相手に伝える 2. 相手（人）の話を聞く 3. 挨拶、返事、報告、質問、相談をする 4. 相手の気持ちを考えて話す 5. 職場の人と世間話などの会話をする 6. 場に応じた言葉遣いをする						
	【「人との関係」についての身につけておくべき課題】*2 ○約束の時間を守る ○携帯電話やメールのマナー ○友人と職場の同僚・先輩との対人マナーの違い ○相手の事情の理解 ○上手な頼み方 ○上手な断り方 ○異性関係や結婚の相談 ○異性との付き合い ○知人とお金の貸し借り						

図5 キャリアガイダンスの活動プログラム「私のキャリア」の概要

*1 特総研（2012）「特別支援学校（知的障害）高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程の研究」より

*2 「見てわかる社会生活ガイド集」編集企画プロジェクト（2013）「知的障害・発達障害の人たちのための見てわかる社会生活ガイド集」より

5 授業の実際

(1) 検証1（平成26年12月9日実施）

① 題材名 「意見発表」「発表のビデオチェック」「活動の良かった点を伝える」

② 授業仮説

「意見発表」、「活動のビデオチェック」、「良かった点を伝える」を繰り返し行うことで、活動シート「具体的な活動内容」に関する力が高まり、今後の活動に対しての意欲が高まるであろう。

③ キャリアガイダンスの活動シート（表5）

キャリアガイダンスの授業は複数の教師が担当していることから、活動シートを活用し、教師同士が活動内容を共有し、生徒に応じて改善することが必要だと考え、「活動を設定した理由」、「高める冲高特15の力」、「意識する特総研16の育てたい力」、「具体的な活動内容（評価の観点）」、「最終的に目指す生徒像」を明記した。活動内容を「就業体験で体験したこと」や「校外実習で想定されること」のように題材を変え繰り返し行うことで生徒の働く力を高めることをねらった。

表5-1 「意見発表」、「発表のビデオチェック」、「活動の良かった点を伝える」の活動シート

活動名		・自分の考えを伝えよう「意見発表」 ・自分自身を知ろう「自分の活動ビデオチェック」 ・良いところに気づこう「活動の良かった点を伝える」
活動を設定した理由		【意見発表】 意見発表は「実習面接での自己紹介」、「10年後の自分」、「就業体験を終えて」、「就業体験の事業所からの評価を見て」について行う。自分が行うこと、行ったことについて考え、目標を設定し、今後の行動を考えることをねらいとする。 【自分の活動ビデオチェック】 鴨下は「自尊心が高すぎる場合は、他者が思っているよりも自己評価が高く『自分ではできる』と評価している傾向にある」ことを指摘している。自尊心が低すぎる生徒、高すぎる生徒が自分を正しく理解するために行う。意見発表以外でも「ロールプレイ」、「実習や学校活動での受け答えの様子」等のビデオチェックを行う。 【活動の良かった点を伝える】 鴨下は「ソーシャルスキルを身につけることを阻む要因として『自尊心』が育っていない」ことを挙げている。活動に基づいた具体的な良い点を聴くことを通して「肯定的な自己評価」を重ねることをねらいとする。
高める 冲高特15の力		【3つの活動に共通】 「1身だしなみ」「2あいさつ・返事」「3言葉づかい」「5対人関係」
意識する特総研 16の育てたい力		【意見発表】 「2意思表示」「3場に応じた言動」「8目標設定」「9夢や希望」 【自分の活動ビデオチェック・活動の良かった点を全生徒から聞く】 「4肯定的な自己評価」「5自己理解・他者理解」
具体的な 活動内容 (評価の観点)		【意見発表】 ①身だしなみは適切か（髪、制服、作業服、肌着は白、きれいな靴） ②声（適切な大きさ 速さ） ③顔（相手を見る 笑顔） ④姿勢 [胸を張る 手の位置（男子は身体の横、女子はへそのやや下で手を組む）] ⑤意思表示（自分の意見を伝えている） 【自分の活動ビデオチェック】 ①自分自身の活動のビデオを見ることができる。 ②自分自身の活動の良かった点、改善点を見つけ、発表することができる。 【活動の良かった点を伝える】 ①発表の良い点を見つけることができる。 ②相手の良い点を伝えることができる。 ③良い点を伝えられたら、感謝の言葉を返すことができる。
最終的にめざす 生徒像		①自分の気持ちや考えを言葉で相手に伝えることができる。 ②相手（人）の話を聞くことができる。 ③場に応じた言葉遣いができる。 ④職場の人と世間話などの会話をすることができる。
準備物	生徒	①発表ワークシート ②発表評価表 ③筆記用具
	職員	【意見発表だけの場合】 ①発表評価表、ワークシートの作成 【自分の活動ビデオチェック+活動の良かった点を伝える】 ①プロジェクター ②スクリーン ③パソコン ④ビデオカメラ ⑤スピーカー ⑥接続用配線

表5-2 「意見発表」、「発表のビデオチェック」、「活動の良かった点を伝える」の活動シートの続き

活動時間	生徒10名で約10分 ①一人の発表(2分) ②一人の発表のビデオチェック+評価票記入(5分) ③生徒全員が発表者の良い点を伝える(3分)	
学習活動の内容		指導上の留意点
①発表・発表を聞く ・発表者はテーマの内容に応じて、事前に発表ワークシートに記入したものを発表する。 ・話を聞く人は起立し、発表者に身体を向けて話を聞き、評価のためのメモは取らない(図6)。 ②ビデオチェック・評価票の記入 ・ビデオチェック時に、評価票の記入を行う。 ・発表者もビデオを見て自分の評価を行う ③活動の良かった点を伝える ・聞いている人は、発表の良い点を、発表者に伝える。 ・発表者は評価してくれた人に「ありがとうございます」と会釈する。 ④発表者本人も自分の良かった点についてコメントする。		①ワークシートに従って行えば、発表ができるようにする。 ②ワークシートは事前に配布しておき、各自で記入しておくようにする。 ③ワークシートを投影することで、話を聞くだけでは理解が難しい生徒も、発表の評価が行いやすくなる。 ④人前での発表が苦手な生徒でも、ワークシートを投影することで発表に参加することができる。 ⑤発表ビデオ映像をプロジェクターで投影し、スピーカーで音声も出力する。 ⑥良かった点のコメントを職員がリアルタイムでパソコンに打ち込み、プロジェクターで投影し、発表者が、コメントを視覚的に確認できるようにする。 ⑦後日コメントを全生徒に配布する。 ⑧生徒は良い点だけを発表者に伝えるので、職員は改善点等も伝える。
【ステップアップ】 ①意見発表を二人一組で行い、お互いに評価し合う。 ②教室の生徒用パソコンに保存した、自分の活動ビデオを見て自分自身を評価する。		



図6 起立して話を聞く

④ 授業仮説の検証と評価

ア 「意見発表」

「就業体験を終えて」「就業体験の事業所からの評価を見て」について発表を行った。繰り返すことで、発表する力が高まった。普段は自分の気持ちを表現しない生徒が発表の際に、他の人が気づかない視点で意見を述べる場面が見られた。

イ 「自分自身を知ろう『自分の活動のビデオチェック』」

アンケートの結果、全員がビデオチェックをすると自分の行動を良くすることができると考えていた。また生徒のワークシートの記入をみると、生徒は自らの良かった点、改善点を把握できており、「思ったよりコミュニケーションが取れていた」「言葉が上手く出てなかったので練習が必要」等の前向きな意見があった。

ウ 「良いところに気づこう『活動の良かった点を伝える』」

見るポイントを明示した発表評価表があれば、教師の言葉かけが無くても、自然に活動ができるようになった。アンケートの結果、全員が活動の継続を望んでおり、クラスメイトから自分の良い点を伝えられた時の気持ちとして「自分はこんなことができるとわかった」「みんなに感謝のきもちでいっぱい」等、全生徒がポジティブな感情表現をしていた。

(2) 検証授業2(平成27年1月6日、7日、9日実施)

① 題材名 キャリアガイダンスと職業科の連携によるキャリア教育の実践

教科間で生徒の働く力を共有することは重要だと考えられることから、職業の授業である校外清掃実習で想定されること、体験したことを題材として、キャリアガイダンスの活動を行った(図7)。



図7 教科間連携によるキャリア教育

② 学習内容と授業仮説

授業は事前学習、実習、事後学習の3回行った(表6)。事前学習、事後学習では付せん紙を用いた意見を共有するグループワークによって「実習で想定されること」「実習で体験したこと」についての意見を出し合い、グループ内で共有した(表7)。校外清掃実習は県立総合教育センター特別支援教育棟で行った。生徒と面識が無い研修員が「生徒に質問をして感謝し、具体的に褒める」「新たな場所の清掃の依頼をする」ことを通して、生徒の初対面の人との接し方、急な

依頼への対応を評価した（表8）。評価項目および基準（表9）そして結果（表10）を示す。

表6 キャリアガイダンスと職業科の連携によるキャリア教育の実践 学習内容と授業仮説

学習内容	授業仮説
検証授業7：実習事前学習（1時間） ・付せん紙を用いたグループワーク	事前学習において、話しかけられた場合の対応方法について意見を出し合うことで、よりよい対応ができるだろう。
検証授業8：校外清掃実習（6時間） ・初めて接する人との対応による働く力の検証	校外清掃実習における、生徒の初対面の人との接し方の様子を観察することで生徒の働くために必要な力（人間関係・社会形成能力）の検証を行うことができるであろう。
検証授業2：実習事後学習 ・ビデオチェック ・付せん紙を用いたグループワーク	校外清掃実習で、急な依頼をされた際の自分がとった対応（言葉、行動）を振り返り、他の人の対応方法も共有することで、今後の学習意欲が高まるだろう。

表7 「意見を出し合おう」の活動シート

活動名		意見を出し合おう「付せん紙を用いた意見を共有するグループワーク」	
活動を設定した理由		事業所が雇用後に重視する力である「対人関係、積極性」を高めるために自分の意見を伝えることは重要である。自分の考えに自信が持てない生徒でも、「自分の意見が否定されない」、「パスしても良い」、「発言しなくても、意見を聞くことが参加である」というルールの下ならば活動に参加できる。	
高める 沖高特15の力		「5 対人関係」「13 指示の理解力」	
意識する特総研 16の育てたい力		「3場に応じた言動」「5 自己理解・他者理解」「8 目標設定」	
具体的な 活動内容 (評価の観点)		①自分の意見、気持ち、実際に行った活動を付せん紙に書く。 ②付せん紙を共有シートに貼るときに読み上げる。 ③他の人が読み上げるのを聴く。 ④意見を出すのをパスしても良い。 ⑤他の人を否定しない。 ⑥意見を聞くとときに「うんうん」「なるほど」「そっかあ」等のあいづちを打つ。	
最終的にめざす 生徒像		①自分の気持ちや考えを言葉で相手に伝えることができる。 ②相手（人）の話を聞くことができる。 ③職場の人と世間話などの会話をすることができる。	
準備物	生徒	①意見の共有ワークシート ②筆記用具	
	職員	①付せん紙（一人あたり 10 枚 7.5 cm× 5 cm） ②シート作成：自分の意見ワークシート（個人用 付せん紙に合わせた枠入り） A 2 版の共有シート（みんなの意見を貼り出す）	
指導上の留意点		活動当日に意見を書くように伝えても意見が少ない場合がある。活発な意見交換を行うために事前に伝えておく。意見を出した方が望ましいが、意見を出すのをパスするのは当然の権利であることも周知徹底する。	
【活動の概要】			
①上記具体的な活動内容①～⑥をルールとして明示し活動を行う。 ②5名1グループに分かれて行う。職員が各グループにつき、全員で意見を出し合い、全員で意見を聴くように促す役割を行う（職員がファシリテーター）。 ③生徒が意見を記入して貼りだしやすいように、自分の意見ワークシートの枠を付せん紙の大きさに合わせる（図8）。また意見を出し合い、共有することを目的として行う事から、意見を貼り出すA 2 版の共有シートにも、「付せん紙の大きさに合わせた貼り出す場所の枠」を設けて活動を行う。			
【ステップアップ】			
①なるべくパスしないで意見を出す。 ②各グループの意見を引き出す役割（ファシリテーター）を生徒が行う。 ③共有シートに枠を設けず、生徒が意見を分類しまとめる。			

	自分の考え1	自分の考え2
話しかけられそうな内容		

図8 付せん紙とワークシートの枠の大きさを合わせる

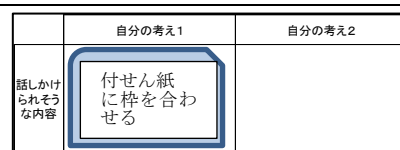


図8 付せん紙とワークシートの枠の大きさを合わせる

表8-1 活動の概要

活動名	働くために必要な力の検証「校外実習における生徒の初対面の人との接し方」
活動場所	県立総合教育センター特別支援教育棟
生徒のレディネス	校外実習で想定される場面について「褒められる」「汚れているところを指摘される」などを想定し、対応方法の共有を行った。検証では生徒が想定していない場面を設定する。
活動の場面設定	①生徒と初対面の特別支援教育班後期長期研修員2名が話しかける。 ②生徒はそれぞれ離れた場所で活動をしており、生徒同士教え合うことはできない。 ③責任者は別の部屋にいる、責任者がいる部屋に行けば相談できる。
検証方法	研修員の観察による評価、話しかける際に撮影したビデオ映像の観察による評価

表 8-2 活動の概要の続き

生徒に対する言葉かけ（生徒と面識がない研修員が行う）		評価項目
1. 質問をして感謝し、具体的に褒める （例 1）掃除してくれてとっても助かるよ。 （例 2）名前を教えてもらってもいいかな。 （例 3）〇〇がとっても上手だね 2. 午後にやるように指示を受けている場所を、 今すぐやるように依頼する（図 9）。 （例 1）今すぐここを掃除してね。		「声」「相手を見る」「姿勢」 「うなづくタイミング」 「言葉づかい」「褒められたら」 「名前を聞かれたら」 「素早く対応できたか」 「事情を説明したか」 「責任者に報告・相談」

表 9 「校外実習における初対面の人との接し方」における生徒の活動の評価項目および基準

評価項目	接し方							急な依頼に対する対応		
	声 大きさ 速さ	相手を見る	うなづく タイミング	姿勢	言葉づかい	名前を 聞かれたら	褒められたら	素早く対応 できたか	事情を 説明したか	責任者へ報 告・相談
◎	聞きやすい	身体全体を向 けて見る	話の節目でう なづける	胸を張る	いつも丁寧な 言葉づかいが できた	時間をかけず に言える	時間をかけず に、お礼を言 える	依頼に対し て、すぐに応 対できた	依頼された ところは後 ほど行う予 定であることを伝える 事ができた	お客様から 別の依頼を 受けたこと を責任者に 報告できた か
○	聞き取れない こともある	首だけ曲げて 見る	うなづかない ことがある	姿勢が崩れる ことがある	丁寧でないこ とがある	時間がかかる が言える	言うときと言 わないときが ある	困惑したが、 応対できた		
△	聞きとりにく い	相手を見るこ とができない	うなづくこと ができない	姿勢が崩れて いる	注意しても改 善する事が難 しい	言葉が出ない	言葉が出ない	困惑して行動 が止まった	か	

表 10 校外清掃実習における初対面の人との接し方における結果

	接し方							急な依頼に対する対応		
	声	相手を見る	うなづく	姿勢	言葉づかい	名前を 言えたか	お礼が 言えたか	素早く 対応	事情を説明	責任者に 報告
生徒 A	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	してない	してない
生徒 B	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	した	事後
生徒 C	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	した	してない
生徒 D	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	してない	してない
生徒 E	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	してない	してない
生徒 F	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	した	してない
生徒 G	○	◎	○	◎	◎	◎	○	◎	してない	事後
生徒 H	○	◎	○	○	◎	◎	○	◎	してない	事後
生徒 I	○	○	◎	◎	◎	◎	○	◎	してない	事後
生徒 J	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	してない	事後

④ 授業仮説の検証と評価

ア 初めて接する人との対応による働く力の検証

評価者から「全体的に好印象、初対面の人と接する態度において、働くために必要な基本的な力がある」という評価を受けた。ビデオ映像の観察を行った結果でも、研修員の観察結果と同様の結果であった。学校での様子から初対面の人との対応は難しいと予想された生徒も、学校では見ることでできない、しっかりした態度（相手を見て、聞き取りやすい声で、正しい姿勢で、うなづきながら）で接することができていた。しかし、急な依頼に対する反応では責任者に報告しない者が 5 名いるなど課題も残った。

イ 「意見を出し合おう『付せん紙を用いた意見を共有するグループワーク』」

事前学習のグループワークにおいて、全生徒で対応方法を共有できた行動（名前を聞かれる、学校について聞かれる、感謝される等）については、校外実習で適切な対応ができた。また事後学習のグループワークで「みんな同じことを言われた」と共有することで、人によって異なる対応をしたことに気づき、事後のロールプレイの取組につなげることができた。

各グループの活動に職員がついて、間接的な指示を行えば、付せん紙を用いて意見を出し合う活動ができるようになった。「自分の意見ワークシート」の枠を付せん紙の大きさに合わせることで、意見を書き、貼り出す行動がスムーズになった。一方で「うんうん」等のあいづちや「うなづき」の行動が定着するには時間がかかると感じた。アンケートの結果、意見を出しやすいと感じている生徒が多く、全員がこの活動で意見を出す力がつくと考えていた。感想として「同じ考え方をしている人もいた」「自分ももっと努力しないとイケない」など、他の生徒の意見を受け入れていることが分かった。

7 研究仮説の検証と考察

(1) 生徒の就職への意欲の向上

生徒全員が、キャリアガイダンスの授業を重ねるにつれて、授業や就職について前向きな感想を示すようになった（表 11）。また自分の良い点、改善点を理解し、改善するための手立てを考えることができた。将来についてとても悩んでいた生徒からも多くの前向きな意見が出された。これらのことからキャリアガイダンスによって生徒の就職への意欲が高まったと考える。今後は計画的な個人面談を通して、生徒の考えを受け止め、適切なアドバイスを行う必要があると考える。

(2) 働くために必要な力（就職する力・就職後働き続ける力）の高まり

特別支援学校学習指導要領解説総則等編（高等部）（2009）は、知的障害のある生徒は「学習によって得た知識や技能が実際の生活の場で応用されにくい」としている。このことから、働く力が高まったかどうかの検証を、学校以外の場所で行った。初めての場所、初めて接する人に対して生徒全員が、「丁寧な言葉づかいで」「自分の名前をすぐに答え」「急な依頼にも素早く対応する」ことができていた。またほとんどの生徒が姿勢を正し、相手を見て対応できており、できない場合があったとされた生徒もビデオでの様子を見ると、適切な対応ができていた場面もあった。これらのことから教室で学習した「人と接するときの基本的な態度」に関する力が高まったと考える。

課題として、急な依頼に対して「事情を説明せずに引き受けた」「責任者に相談・報告しなかった」等の行動が挙げられる。この課題に対応するために、「キャリアガイダンスの年間時数を今年度の36時間から、72時間に増やし活動プログラムの内容の充実を図る」「生徒の活動のビデオチェックを次年度の流通サービスの授業の年間計画に取り入れる」等を行う予定である。園田は「コミュニケーションで大切なことは、マニュアル通りにただまねをすることではなく、自分でいろいろ考え、練習すること」としている。働くために必要な力は幅広く、内容の全てを学校で取り扱うことは難しい。今後も「生徒が初めて経験する場面でも、生徒自身がよりよい対応方法を考え、選択し、行動に移すことができる力を身につけること」を目指して、事業所の実態に即した実践的な活動を題材とした、生徒の働くために必要な力（就職する力・就職後働き続ける力）の向上を図るプログラムを継続する必要がある、それが生徒の現在および将来の社会参加につながると考える。

表 11 キャリアガイダンスの授業についての生徒からの感想（原文まま）

みんな優しく、みんなのきたいをうらぎらないように本気で大学進学に向けてがんばろうと思った。	まなぶことわいっぱいありますが、たのしくできているのでかんしゃです。
相手とコミュニケーションをしているいろいろな話をしていくのでとてもうれしいです。次からももっといろいろな人と話していきたいです。	とてもわかりやすく、理解しやすいです。自分の将来に役にたてるからとてもいい授業だと思います。
すごく勉強になるし、社会のことや人のことが分かった。	嬉しくて頑張れる気持ちになりました。
前よりも楽しくなっていると思う。これからはキャリアガイダンスをやったほうが良いと思う。	自分の改善点を直せるのでとても助かって居る。自分が以外と集中して取り組んで居るので良かった。
入学して最初のキャリアガイダンスの時、自分はメモを取っても、取らなくても、かわらないと思っていたけど、だんだんキャリアガイダンスの授業を受けているうちに、メモは大事だと思いました。だからキャリアガイダンスは大切な授業だと思いました。	自分の身のためになるコトをしている。仕事をつづけるために、楽しむために。生きるために。今やっていることが、そんでない。良いコトをやっている。とても良い。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 道徳、自立活動、特別活動、職業のねらいや内容を中心とした各教科等を合わせた指導であるキャリアガイダンスの授業では、主として「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」を高める取組を行うことが必要であることがわかった。
- (2) 検証授業の結果を踏まえた、キャリアガイダンスの授業における活動プログラム「私のキャリア」の概要が作成できた。
- (3) 実践的な活動によって、生徒の就職への意欲が向上し、働くために必要な力の中の「人と接するときの基本的な態度」に関する力が高まった。

2 課題

- (1) 活動プログラム「私のキャリア」のさらなる検討、実践、評価、改善。
- (2) 生徒の働くために必要な力を高める取組を行うには、キャリアガイダンスだけでなく、全ての授業においてキャリア教育で育成すべき力である『基礎的・汎用的能力』を踏まえた『沖高特15の力』と『特総研16の育てたい力』を意識した授業づくりを行う必要がある。

〈参考文献〉

- 高山恵子・平田信也 2014 『ありのままの自分で人生を変える 挫折を生かす心理学』
高山恵子・平田信也 2014 『実践！ストレスマネジメントの心理学』 本の種出版
岩瀬直樹・ちょんせいこ 2014 『信頼ベースのクラスをつくる よくわかる学級ファシリテーション① ーかかわりスキル編』 解放出版社
渡辺明広 2014 『軽度の知的障害のある生徒の就労を目指した青年期教育』 黎明書房
園田雅代 2013 『イラスト版子どものアサーション 自分の気持ちがきちんとと言える 38 の話し方』 合同出版株式会社
鴨下賢一 2013 『学校が楽しくなる！発達に気になる子へのソーシャルスキルの教え方』 中央法規出版株式会社
菊池一文 2013 『実践キャリア教育の教科書 特別支援教育をキャリア発達の視点で捉え直す』 株式会社学研教育出版
「見てわかる社会生活ガイド集」編集企画プロジェクト 2013 『知的障害・発達障害の人たちのための 見てわかる社会生活ガイド集』 株式会社 ジアース教育新社
文部科学省 2011 『中学校キャリア教育の手引き』 教育出版株式会社
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2010 『知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究』 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2010 『知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究』 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
文部科学省 2009 『特別支援学校学習指導要領 総則等編（高等部）』
文部科学省 2009 『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（高等部）』
國分康孝監修・清水井一編集 2006 『社会性を育てるスキル教育 35 時間 中学 1 年生』
國分康孝監修・清水井一編集 2006 『社会性を育てるスキル教育 35 時間 中学 2 年生』
國分康孝監修・清水井一編集 2006 『社会性を育てるスキル教育 35 時間 中学 3 年生』

〈参考URL〉

- 「中央教育審議会 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」
〈http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf〉
(2015/2/2 アクセス)
「文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 教育支援資料 ～障害のある子供の就学手続きと早期からの一貫した支援の充実～ 平成 25 年 10 月」
〈http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/311001/files/2013111100307/2013111100307_www_pref_kochi_lg_jp_uploaded_attachment_105275.pdf〉 (2015/2/2 アクセス)
「沖縄県教育委員会 県立特別支援学校編成整備計画（平成 24 年度～平成 33 年度） 平成 24 年 3 月」
〈http://www.pref.okinawa.lg.jp/edu/somu/jujitsu/gakkozukuri/hense/documents/27_henseiseibikeikaku.pdf〉
(2015/2/2 アクセス)
「厚生労働省沖縄労働局 障害者雇用状況報告の集計結果」
〈http://okinawa-roudoukyoku.jsite.mhlw.go.jp/hourei_seido_tetsuzuki/yuryou_muryou_shokugyou/hourei_seido/syogaisyanokoyou.html〉 (2015/2/2 アクセス)
「独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2012 『特別支援学校（知的障害）高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究ー必要性の高い指導内容の検討ー』 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所」
〈<http://www.nise.go.jp/cms/7,7041,32,142.html>〉 (2015/2/2 アクセス)